

ヒバード先生の信仰体験： 1972年クリスマス礼拝説教から

枝 澤 康 代

Abstract

This study note transcribes Dr. Esther Hibbard's sermon in Japanese with notes. The sermon was given at Tohokugakuin University as a Christmas sermon on December 18, 1972, at its Dohi campus. It was recorded on a cassette tape and has been kept by Mrs. Sally Lawson, niece of Dr. Esther Hibbard, as one of her mementos. Mrs. Lawson kindly allowed me to copy the tape.

The quality of the recording is quite poor and there are some missing sounds which I cannot distinguish in the tape. However, as I believe this sermon is very important as a way to know Dr. Hibbard's faith, I would like to share it publicly and let it contribute further to Hibbard's study.

I. はじめに

本稿は、同志社女子大学初代学長のエスター・L・ヒバード博士（以後、ヒバード）の研究資料収集の過程で、姪であるサリー・ローソン氏¹から提供された資料の中から出てきたカセットテープに録音されたヒバードの日本語による説教を文字化し、それに考察と註を付けたものである。ヒバードの宣教師としての信仰を知るためには、非常に貴重な資料であると思われるので、録音状態が悪く、聞き取れない部分もあるが、あえて虫食い状態の説教を公表することで、今後の研究の一助としたい。

本稿で使用した文献は、ハーバード大学ホートン・ライブラリー所蔵のアメリカン・ボード宣教師文書、ヒバードの自伝、ウィスコンシン州立歴史協

会アーカイブスに保管されているヒバード書簡を中心に、その他の関連する資料を使用した²。

Ⅱ. 説教が録音された背景

ヒバードは、マサチューセッツ州のマウント・ホリヨーク大学に入学して以来、故郷のウィスコンシン州マディソンの家を離れているときは、毎週必ず家族に手紙を書くことを習慣としていた。その手紙は全て母が丁寧に保管していたが1954年に父が死亡し、母がマディソンを離れて弟のラッセル³の住むミシガン州に移住するときに、父の手紙と一緒にウィスコンシン州歴史協会のアーカイブスに寄付された。それとは別に、ヒバードは戦後テープレコーダーが普及し、個人での録音が簡単にできるようになってからは、音声による文通もしばしば行っていた。今回サリー・ローソン氏から提供されたテープは、その一つであると思われる。

今回使用したテープは、ヒバードが、1973年に東北学院を退職し帰米する前年のクリスマスに行った日本語での礼拝説教が録音され、それが更に編集されたテープである。テープの冒頭には、おそらく同僚の宣教師と思われる男性の声で、「このテープは家族のために録音した」ことが英語で述べられ、東北学院大学の初めての学生デモの様子と、松島で行われた東北地区の宣教師と宗教関係者の研修会の子の音声が入っている。その後、唐突に、説教者であるヒバードを紹介する言葉が途中から入っており、ヒバードの日本語説教がそれに続いて録音されている。

東北学院大学史料センターによると、この説教は1972年12月18日（月）の土樋キャンパスでの大学クリスマス礼拝でのメッセージであり、説教者の紹介をしているのは、当時の院長・学長であった小田忠夫先生であるとのことである。

ヒバードの説教原稿は、残念ながら残っていない。同志社時代から、ヒバードは日本語で説教や講演をするときは、原稿をローマ字表記にして、それを

読むという形をとっていた⁴。したがって、本説教もどこかにローマ字原稿があったと思われるが、東北学院大学にも遺品の中にも発見できない。

テープの録音状態が良いとは言えないのであるが、文字起こしに際しては、聞き取れる音を手掛かりに、前後関係から可能な限り推測して言葉を当てはめた。明確には聞き取れないが、意味的に推測できるところは、[] で表記した。それでも、まったく推測不可能な部分は、…のマークで示すことにした。以下にヒバードの説教の本文を筆者が聞き取ったままと提示すると同時に、いくつかの点について註を付記する。

Ⅲ. ヒバードの説教

クリスマスの季節を皆さんと一緒に祝いして、そしてお話をすることが出来る機会を与えられまして、本当に嬉しく思っております。ただ一つ残念に思うことは、私は神学者でもございませんので、説教をすることはできませんけれども、私の50年にわたる色々のクリスマスの思い出を巡って、それによって私の信仰の体験を皆さんに申し上げまして、なんとか参考になるのではないかと考えておりますのでございます。

まず最初に、私が思い出すのは、私の、あるアメリカの女子大学の1年生のときのことであります。休暇の前で、寄宿舎⁵で荷物を作ったり、クリスマスプレゼントの用意をしたりして、たいそう忙しかったのであります。そしていよいよ夜中ごろ休んで、ぐっすりと寝入りました。それから間もないように、私は感じられていますが、美しい歌声が聞こえてきます。寝とぼけておる私には、その声がどこから響いてくるのか、ちょっとわかりませんでした。ふと、天の使いの歌声かもしれないと思いました。そうだ、私は天国に来ているに違いありません。ほら、その天使の声は、「神には御栄え、地には平和」と歌っているではありませんか。嬉しさのあまりにしばらくうっとりとしていましたら、段々と目が覚めてくると、自分の寝床にいることに気が付いて、失望して、思わず涙を流しました。その間に声がだんだん遠く

なって、とうとう消えてしまいました。

翌朝、食堂へ私が入りますと、友達に冷やかされました。「まあ、何とお寝坊さんでしょう。今朝、上級生がせっかくきれいな歌を歌ってくださったのに、あなたはちっとも起きて、拍手喝さいしなかったのは、どういうわけですか？お姉さんたちは大層怒っているのよ」と皆で言いました。私が天使の歌声と思ったのは、すなわち上級生の合唱であったわけであります。しかし、ある意味においては、私の方がその歌をもっと深く感じたかもしれないのです。

私にとって一番影響の与えられた経験は、私がアメリカであるクリスマスのときに見た劇ではなかろうかと思えます。この劇は、ある大学の劇研究サークルによって上演されたのでございますが、ここで、その内容をお話しさせてもらいたいと思えます⁶。

中世の時代において、パリの聖母の教会にマリア様の美しい像が立っていました。その頭には宝石をちりばめた冠をかぶり、体には空色の衣をまとい、手には御子イエスを抱いて、優しく微笑んでいるお姿でした。その教会に属している修道院では、このマリアの像を世にもない宝のように崇拝しておりました。なぜかと申しますと、それについて、いにしえより一つの神秘的な伝説があったからであります。というのは、クリスマスの前夜において、その像の前で一番尊いものを捧げた人に対して、マリア様の像の手が動いてその人を祝福するという謂れでありました。そこで、修道者はクリスマスが近づいてまいりますと、あらゆる趣向を凝らして何か美しいものを自分の手で作り、御子イエスに捧げようとしていました。あるいは、ミサ曲を作曲し、あるいは聖書を書き写し、それに色彩豊かな歌詞を書いて飾りました。あるいは、御子イエスのために小さなゆりかごを作り、それに彫刻を施している人もありました。しかし、何百年の間、今まで一度もその像の手が動いたという奇跡はなかったので、皆失望していました。

ところで、その修道院に、一人のフランソワという元手品師であって、軽

業の上手な修道者がおりましたが、その人は無教育で、何も教養もなかった
ので、他の修道者によって軽蔑されていました。しかしこの人は大変敬虔な
信者であって、何とかして自分も御子の前に何か捧げたいという気持で一杯
でした。けれども他の修道者たちは、彼をのけ者扱いにして、決してそのマ
リアの像の立っている御堂へ入ることさえ、彼に許さなかったのであります。

とうとうクリスマスの前夜になりました。そして修道院の中は、いよいよ
ミツバチの巣のようにずいぶん忙しくなっており、修道者はみんな一生懸
命自分の捧げようと思っているものの仕上げに夢中になっていたのであります。
しかし、このフランソワという手品師は、どこにも姿が見えませんでした。
だんだん夜が更けて、夜中に近づいてまいりますと、ミサの準備にかか
ります。そのときに皆は初めてそのフランソワという修道者がいないとい
うことに気がつきます。一人の若い修道者を探しにやりましたが、彼は果た
してどこにいたでしょうか？なんと、御堂の中で、しかもマリア様の像の真正
面で、彼は飛んだり跳ねたり、球を取ったり投げたりして、一生懸命に自分
の持っているだけの技術を発揮しようと思って、フランソワが汗にまみれて
おります。これを見た若い修道者は驚いて、もったいないよ！と叫びまし
た⁷、夢中になっているフランソワには聞こえません。ますます早く、五色
色の球を高く上げたり、とんぼ返りをしたりして、これは人間か、狂ったの
かと思われるほどの早業でありました。無謀を咎めて、若い修道者は院長
さんを呼びに行っている間、とうとう疲れ果ててフランソワは石畳の上に倒れ
ました。院長さんは多くの修道者を従えてきて、御堂の入り口に入ったち
ょうどその瞬間に、驚くべきことには、そのマリア様の像の手が悠々と動
いて、フランソワの頭の上に祝福しているように止まりました。すると修道者
たちは一辺に跪いて、うやうやしく賛美の声をあげました。しかしそのフラ
ンソワの魂は、もうすでに天国に上がっております。

私がおその上演を見ていると、じっと立っているマリアさんの役をしている
人の手が動いたとき、思わず涙をこぼしました。なぜなら、その修道者の全

く献身した気持ちがあまにも美しかったからであります。つまり、たとえ自分に才能が無くても、たとえ貧しくても、人間が謙虚な態度で、一生懸命に神様に仕えようと思えば認められるということ、教えられたわけであり、神がその独り子をこの世に送り給うたことに感謝し、私たちは心身ともに神様に捧げなければならないということ、つくづく感じました。そこで私が一生宣教師として勤めるという決心をいたしました。早速ミッションの本部に申し込んだところ、ちょうど私の生まれ故郷の日本に、一人の英語教師を求めている学校があるということで、私はそこへ派遣されてまいりました。

15年ぶりに私の生まれた国へ戻ったときの私の気持ちを察してください。言葉がはっきり分からなくても、何となく聞きなれたような気がしますし、美しい景色は一向に変わりはないし、皆さんは昔と同じように親切に私を暖かく歓迎してくださいましたし、何より嬉しかったのでございます。

しかし、悲しいことには、そのクリスマスの思い出は、楽しいものではなかったと言えます。なぜなら、昭和16年12月7日の真珠湾の攻撃のとき⁸、私はアメリカの大学院の研究生として国に帰っておりましたが、その日の深刻な気持ちを一生忘れることはできません。私の愛する日本人と、私の代々の先祖の国が敵対するようになってしまっ、戦争を始めるようになったのは、何か自分にも責任があるかのように思っ仕方がありませんでした。もし私が健闘して、もっと熱心に伝道していたならば、そんなことにはならなかったかもしれないという絶望へといざなつたと言えます。それに戦争の結果がどうなるうとも、日本に戻る機会はおそらくないだろうと思えば、私の一生の計画が覆されるような気がして、心細くなつてまいりました。

その日は最初のショックで私は麻痺していましたが、アメリカ人の日本人に対する憎しみや疑いが日増しに強くなっていくのが、私は板挟みになるような気がしてきました。もちろん、自分の国に勝利を得てほしいけれども、それと同時に、美しい日本の建物が爆撃され、多くのお友達が殺されては堪

らないような気がしたのであります。それで、私はしばらく手を覆いながら、町をウロウロしました。そして、その年のクリスマスになったら、お祝いするどころか、ただこの恐ろしい戦争が早く収まるように涙を流しながらお祈りするほかにはなかったのであります。

だんだんと戦争が長引いて、ますます双方の国の人々が憎しみ合うようになってくるにつれて、私の立場は苦しくなってくるのでした。このままでは、日本へ戻る機会は想像もできないだろう。その場合には、アメリカで就職を求めなければならない。就職と言えば、教えること以外には私に適したお仕事はないだろうなどと考えていました。ちょうどそのとき、ある大学で相当待遇のいい、興味のあるお仕事をしてくれないかというお話が出たので、私はよほどそれに応じようかと思いました⁹。

大学の冬休みになると、私は久しぶりに、大学の同級生の家に招かれてまいりました。お夕食を町のレストランで済ませて、暗くなってから私は車でその家へ連れて行ってもらいました。友人がその乗用車をガレージにしまっている間、私はどんどん先に進んで、勝手口から入ろうとしました。するとお友達が、「ちょっと待ってください。電気をつけてあげるから」と言いましたが、せっかちな私は、「大丈夫よ」といい、入り口で一步も先にすすまないうちに、私は足を踏み外して、12段の高さの階段を落っこちました。そして、コンクリートの床に頭をぶつけました。しばらく意識不明になった後に、気が付くと、そばにお友達が跪いて手をもみながら泣いて、言っていました。「大丈夫ですか？いや、申し訳ないことをしてしまいました。その入り口が危険であることを知りながらも、不案内なあなたに注意しなかったというのは、はなはだすみませんでした。本当に怪我はありませんか？」などと、心配そうに言いました。

ゆっくり手足を見回してみても、首を回したりして、体に怪我がないかを調べたところ、頭痛以外には何の変わったところもなさそうでした。そこでお友達に支えられて、私はゆっくりと階段をあがって、ベッドで休みました。

間もなくお医者さんが見えて診断してくれたところ、私が助かったのは一つの奇跡に違いないと言いました。なぜなら、あんな高い所から落ちて、しかもコンクリートで頭を打っては、命にかかわることであるのに、私の場合傷一つなかったということは、実に不思議であると。私は後で考えてみると、おそらく冬で私はとても分の厚いコートを着ていたし、また危険であるということを微塵も知らずに、笑いながら落ちたからではないかと思いました。いずれにしても、もし神のお守りがなかったとすれば、私はもうとうに死んでしまっていたでしょう。この経験によって、私は、神様が私のような者にでも御用があるということを悟りました。もしそうでなかったならば、その場で私の命は絶たれてしまった筈なのです。こんなに不思議に命拾いをさせていただいたのは、どんなに〔素敵なことか〕とさえ思えました。そこで、国に居残って楽な生活をするよりも、もしその機会があれば、真っ先に日本へ戻って伝道を続けようという決心がつかしました。

ちょうどその当時、日本は敗戦になって、宣教師たちは日本へ戻るようにと招かれました。私は宣教師として許可を得て日本へ戻ったその初めの日々は、実に苦しかったのであります。しょっちゅう停電で、明かりも暖房も妨げられたし、食料も国から送ってもらった以外には、日本人並みなので、非常に欠乏していました。東京へ行く用事があるとすれば、命がけで普通列車に乗って、十何時間もかかってやっと、へとへとに疲れて着いたのであります。車に乗るなどとは、夢にも思えないことであって、どこへ行くにしても、〔ひどいこと〕でありました。

この状況のさ中であって、日本へ戻ってからの初めてのクリスマスを迎えました。幸いに私の属していた同志社大学は爆撃を受けなかったため、荒れてはいたけれども、講堂は使うのは使えました。そこで、戦争の5年間しまっていた楽器を取り出し、埃を払い、練習し、オーケストラの伴奏でもってメサイヤを演奏しようとしたところ、聴衆が驚くほど参加しましたので、その整理に困りました。

申すまでもなく、その頃ろうそくは宝石のように貴重なものであったのですが、それにもかかわらず、キャンドル・サービスを「[する計画をして]」おりましたので、私はアメリカのお友達に頼んで、使い古したろうそくを何百本か送ってもらいました。それを聖歌隊に持たせたのであります。しかし、行進曲が済んでから、ろうそくを消し、電灯をつけて、メサイヤを演奏し始めた途端、停電になって会堂は闇に包まれてしまいました。聴衆はびっくりして、息の根も止まるかのようでありました。ところがコーラスの指揮者は誰かから懐中電灯を取り上げ、それでもって指揮を続けたのであります。そうすると、その真っ暗闇の中で聴衆はますます静かになってきて、うっとりとしてメサイヤを聞いていました。すなわち、荒野の闇を貫く神の光が、あたかもその場へ差し込んできたかのような神秘的な気持ちがしました。その後何年間もキャンドル・サービスに接していますが、その最初の時ほど印象深い経験に恵まれたことはございません。

その時代からもうすでに30年もたって、今年で引退し、祖国へ帰らなければならぬということは、私にとって実に寂しい気持ちでいっぱいでございます。しかし、私の一生を神様に捧げた以上、こんどこそきつと何かのお役に立つのではないかと考えておるのでございます。たとえ鈍くても、たとえ体が弱ってきても、神に仕える気持ちが一杯であればこそ、きつとあの無学な手品師と同様に認められるに違いありません。そこでクリスマスの季節が来るたびごとに、私は御子イエスの前にまかり出て、私の持っている貧しい捧げものを携えて、御前にひれ伏すのでございます。

若い皆様も、将来を選ぶときに、ぜひ自分を心身ともに神に捧げるように私は切にお願いしたいと存じます。そうすればこそ、神様に認められて祝福されるに違いありません。そして喜びもどんなにか心のうちに満ち満ちると私が経験している以上、あなた方にもそれを保証することができます。

最後に、クリスティーナ・ロセッティという英国の女流詩人の書いた歌¹⁰をご紹介します。私の話を閉じたいと思います。

…

真冬のさなかに、
木枯らしの冷たくなる
地上は鉄のように固く
水は石のごとく
雪は雪に降り、積もりに積もって
昔の真冬に

…

まぶねに
御子イエスは生まれられた

貧しい吾は何を御子イエスに捧げようか
もし吾は羊飼いであれば、子羊を捧げよう
もし吾は博士であれば、力の限り捧げるでしょう
しかし、吾は何を捧げようか
吾はわが心を捧げよう

祈祷

ご在天のお父様、私たちはその御恩寵に対して心から感謝を申し上げます。私たちは貧しい存在であるが故に、博士たちのように貴重な捧げものを捧げることができないことを残念に堪えません。しかし私たちに授けられている力と才能をことごとくあなたにゆだねて、あなたの御用に立たせて下さいますようお願いいたします。特に冬の寒さのために飢えたり、病気をしている兄弟姉妹を想う気持ちを増し加えてくださいますよう切にお願いいたします。現在、ベトナムで行われている停戦の交渉が難航していますが、どうかこの年内において世界が平和になるようお導きをお願いいたします。この切なる感謝と願いを、平和の主、イエス・キリストの御名によって御前にお捧

げいたします。アーメン。

IV. ヒバードの説教から示唆されること

上記の説教は、筆者の知る限りでは、今までに語られなかったヒバードの神秘的な信仰体験に満ちている。学生時代の初めての寮生活でのクリスマスの思い出や、ヒバードの信仰に一番の影響を与えたというクリスマス劇の話、また地下室への階段から落ちた話は、家族への手紙にも出てこないし、何かの折に口頭で話されたということも聞いたことがない。性格的にどちらかというとい内向的で、自分を外に出すことには非常に慎重であったヒバードには珍しい説教だと言える。定年で間もなくアメリカに帰国することを前にして、自身の信仰の集大成として、この説教をまとめたのかもしれない。以下に、説教から示唆される3つの点について、私見を述べてみたい。

まず、学生時代のクリスマスの夢の話であるが、ヒバードが「ある意味においては、私の方がその歌をもっと深く感じたかもしれない」と言っていることは、興味深い。ヒバードがアメリカン・ボードに提出した宣教師申込書の一部に、Life Sketch という申込者のそれまでの人生経験をまとめている文がある¹¹。それによると、ヒバードは、学生時代は聖歌隊に所属し、教会の礼拝には毎週出席していたが、YWCA やボランティア・グループの活動にはあまり熱心でなかったようである。理由は、勉強が忙しかったのと、グループの宗教についての枠にはまった古い考え方や行動に同調できなかったからだと書かれている。クリスマスのキャロリングにきた上級生たちがどのグループなのかは不明であるが、習慣的にクラブ活動の一つとして歌っていて、クリスマスの意味を心から味わって歌っているのではないと、ヒバードは感じていたということではないだろうか。

次に、ウィスコンシン大学の学生劇の話である。ヒバードは、大学を卒業したら教師になりたいと思っていた。そのために、主専攻の英文学だけでなく、副専攻で生物学と音楽を取り、英語、理科、音楽の先生になれるように

していた。できれば宣教師にはなりたくない、そのような能力はないと思っていたヒバードであった。しかし、勉学に興味も熱意もないアメリカの公立高校の生徒を教える困難さを体験した後、中国で教育宣教師をしていた母校の先輩の話聞いて、自分もそのような宣教師になりたい、自分が生まれた国の日本で教えたいと思ったのであった。そのヒバードを更に後押ししたのが、この劇からのメッセージであったのであろう。

この劇を見たのは、おそらく1928年のクリスマスのことと思われる。なぜならアメリカン・ボードに日本への教育宣教師として派遣されることを申し込んだのが、1929年1月だからである。申し込みから3か月という超短期間の審査の後、1929年4月に同志社に派遣されることが決まり、ヒバードは同年9月に、26歳で京都に到着した。ヒバードは、周囲の期待に違わず、非常によく働き、すぐに終身宣教師となってもらいたいと望まれた。しかし、同志社の中で一番若い宣教師として働くことは、大変に気骨の折れることであったと思われる。その頃まだミス・デントンが健在であり、デントンのやり方に対して若いヒバードがついてゆくことが難しかったことは、家族への手紙にも時々書かれている。それでも、宣教師の見習い期間を終えて、終身宣教師になる決心をした背景には、日本や日本文化への尽きぬ興味もさることながら、来日前の劇で与えられた強い献身の思いがあったのではないだろうか。

さらに、戦後再来日の決心をした背後に、地下室転落事故があったとは驚きである。この事故のことは、ヒバードの帰米中（1941年4月～1946年10月）の家族宛の手紙には一行もそれらしい報告がないし、自伝にも書かれていない。

ヒバードは、帰米中にミシガン大学大学院で博士号を取得し、ミシガン大学とノースウェスタン大学シカゴ校で、日本語と日本文化を教えた。日本に戻りたいという気持ちは、最初からあったようであるが、アメリカで就職したいという気持ちも強く、アメリカでの教師の道を真剣に探していた。当時は、大学卒業直後とは違い、教師の職はかなり見つけやすい状況になってい

たので、ヒバードが決心さえすれば、アメリカに残る道はあったのである。実際、ヒバードは、日本での給料よりも数倍以上給料のよい教師の仕事をオファーされたが、それを断って日本に戻ることにしたと、再来日前の新聞のインタビューに答えている（註9を参照）。

しかし、ヒバードはアメリカに残るよりも困難であることが分かっている日本に戻ることを選んだのである。なぜであろうか。戦後の日本の窮乏状態はアメリカにも伝えられていたから、生活の困難も考えたはずである。また、ヒバードは日本にキリスト教を広めることが如何に困難かを知っていて、宣教師としての役割を果たせないことを恐れていたとしても不思議ではない。上記の説教に、真珠湾攻撃があった日に、ヒバードは、もし自分がかもって熱心に伝道していたら、戦争にはならなかったのではないかと思ったと述べ、宣教師として何もできなかったという無力感を持っていた。にもかかわらず、ヒバードは日本に戻ることを選んだのである。そのようなヒバードが、もう一度日本に宣教師として派遣されるためには、ゆるぎない信仰と確信があったからだと思われる。すなわち、「たとえ何も無くても、心を尽くせば、神は良しとされる」との信仰であり、転落事故から守られたことで、どのように状況が悪くとも神は常に共に居給うとの確信があったからだと思われる。

その故に、ヒバードは、説教の最後に、ロセッティのクリスマス・キャロルを引用したのだと思われる¹²。ロセッティの詩ほど、ヒバードの信仰を代弁しているものはない。以下に、その詩の全体（英語と日本語訳）を示す。ヒバードが説教で用いた日本語訳を見つけることができなかったので、同志社女子大学名誉教授の杉野徹先生に翻訳をお願いした。

In the bleak mid-winter
Frosty wind made moan,
Earth stood hard as iron,
Water like a stone;

Snow had fallen, snow on snow,
Snow on snow,
In the bleak mid-winter
Long ago.

Our God, Heaven cannot hold Him
Nor earth sustain;
Heaven and earth shall flee away
When He comes to reign:
In the bleak mid-winter
A stable-place sufficed
The Lord God Almighty,
Jesus Christ.

Enough for Him, whom cherubim
Worship night and day,
A breastful of milk,
And a mangerful of hay;
Enough for Him, whom angels
Fall down before,
The ox and ass and camel
Which adore.

Angels and archangels
May have gathered there,
Cherubim and seraphim
Thronged the air -

But only His mother
In her maiden bliss
Worshipped the Beloved
With a kiss.

What can I give Him,
Poor as I am?
If I were a shepherd
I would bring a lamb;
If I were a wise man
I would do my part;
Yet what I can, I give Him-
Give my heart.

クリスマス・キャロル

クリスティーナ・ロセッティ

杉野徹訳

寒々とした真冬どき
木枯らしが 吹きすさび
大地は 硬く鉄のよう
水は まるで石のよう
雪が 積りにつもり
しん しんと
寒々とした真冬どき
遙か むかしに 降っていた

われらの神を あまりに偉大な
この神を 天は抱ききれず
地もとうてい抱えきれない
天も地も 御子が君臨しようと
来られたら まったく霞んでしまうだろう
寒々とした真冬どき
全能の主なる神 イェス・キリストが
充分と 満足された場所は 馬小屋だった

天使らが 昼となく夜となく
崇める御子には
胸いっぱいのおっぱいと
まぶねいっぱいの子草で
こと足りた
天使らが ひれ伏す御子には
賛美する牛とロバとラクダで
こと足りた

天使らと大天使らが
そこに集っていたかも知れぬ
ケルビムとセラフィムの天使らが
大空に群がっていたかも知れぬ
だが ただ生娘の祝福に包まれた
御子の母だけが
愛し子を そっとキスして
賛美した

私は貧しいけれど
御子に何を差し上げよう
もし私が羊飼いだったら
一頭仔羊を捧げよう
もし私が三人の博士の一人なら
私は自分の役を果たすだろう
でも私に出来ること 私は
御子に私の心を捧げよう

V. 終わりに

本研究ノートでは、ヒバードのクリスマス説教の文字起こしと、そこに示されるヒバードの信仰の一端について私見を述べた。ヒバードの信仰については、まだ全体像が分かっているわけではない。否むしろ分からないというのが正解であろう。しかし、今回ヒバードの姪によって提供された音声テープは、そのきっかけを与えてくれた。ヒバードの宣教師への申込書も、ずっと探していたのであるが、やっとホートン・ライブラリーのアメリカン・ボード宣教師文書の中に発見できたので、今後それを丁寧に読むことで、宣教師として40年もの長い年月を日本に捧げたその原点を知り、その他の文書と合わせ読むことで、その後の活躍の原動力を探りたいと思う。

謝辞

今回のテープ起こしにあたっては、多くの方にご協力をいただいた。同志社女子大学名誉教授の坂本清音先生と東北学院大学史料センターの日野哲様には、テープを何度も聞き直していただいて、筆者の聞き取れないところを補ってくださった。同志社女子大学名誉教授の杉野徹先生は、ロセッティの詩の原文を探してくださり、更に翻訳も担当してくださった。東北学院大学史料センターの皆さまには、説教日の確定について大変お世話になった。最

後に、今回もホートン・ライブラリーでヒバード文書の発掘に助力してくれた友人の Mrs. Judie Crouse には、感謝してもしきれない。この場をお借りして皆様に心からお礼を申し上げたい。

註

- 1 サリー・ローソン (Sally Hibbard Lawson) (1940-)：ヒバードの弟のラッセル・ヒバード (Russel L. Hibbard) の次女。インディアナ州在住。伯母の資料をまとめて持っており、ヒバード家の中で、伯母に関することの連絡役となっている。サリーの思い出によると、伯母のヒバードには、彼女が賜暇で帰国した時にしか会えなかったが、手紙やクリスマスプレゼントなどを通してよく会っていた気がするとのことである。
- 2 アメリカン・ボード宣教師文書、ヒバード自伝、ウィスコンシン州歴史協会アーカイブスのヒバード書簡の出典資料、及び出典の表記に関しては、拙著「終身宣教師への道—Esther L. Hibbard の場合—」(同社女子大学英語英文学会紀要『アスフォデル50号』2015年、pp.68-90) を参照されたい。
- 3 ラッセル・ヒバード (Russel L. Hibbard) (1910-1987)：ウィスコンシン大学卒。アメリカ初のウィスコンシン州失業保険開発に中心的な役割りを果たした。後にデトロイト、ミシガン州に居を移し、ジェネラル・モータース社の失業保険部長を務める。1男3女を設ける。ラッセルは、父カーライルの死後、それまで父が行っていたヒバードの財産管理も引き受け、最後まで姉を支えた。
- 4 ヒバードがこの日本語説教を作成するとき、最初は英語で書いて、それを自分で日本語に翻訳したのか、誰かに翻訳を依頼したのか、それとも最初から自分で日本語(ローマ字)で書いたのかは不明である。説教原稿を作成した時は、来日後43年も経て、日本語にはかなり精通しており、最初から自分で日本語で書いたのかも知れない。
- 5 ヒバードは、マウント・ホリヨーク大学では、最初は Judson Hall という寄宿舎に入った (Yasuyo Edasawa, 2013. “Miss Hibbard’s First Year in Japan: the start of a remarkable missionary career” 『アスフォデル48号』 pp.102)。後に、Safford Hall に移ったが、夢の話は Judson Hall でのことと思われる。
- 6 ヒバードに最も影響を与えた劇とは、ウィスコンシン大学のダンス劇研究サークル Orchesis が上演した『聖母と軽業師』(アナトール・フランス著、1890年) だと思われる。ヒバードの1941年12月7日の家族宛の手紙に、その週の月曜日にシカゴで Woman’s Research Club の会合があり、そこで読まれたのが “The Juggler of Notre Dame” であり、「それはウィスコンシンで Orchesis が上演

したあのクリスマスのダンス劇を思い出させてくれた。それは、人間の心が紡ぎ出した最も美しい伝説であると思う」とある。なお、原作では主人公の名前は、バルナベであるが、フランソワというのはヒバードの記憶違いであろう。

- 7 この「もったいないよ！」の意味は、軽業師が聖母の前で軽業を見せることは聖母への冒涇であり、もったいない仕業であるという意味であると思われる。原作の翻訳 (KM 文書庫、アナトール・フランス『聖母の軽業師』片山幹生訳 URL : <http://km.hatenadiary.com/entry/2013/03/04/014459>) には、「この素朴な男が聖母マリアのために、その才能と知識をこのように使っていることを理解できなかった二人の古株の修道士は、聖母を冒涇していると大声を上げました」とある。
- 8 真珠湾攻撃は、日本の日付では1941年12月8日(月)であるが、アメリカでは1941年12月7日(日)となる。この日のヒバードは、日曜日であるので、家族宛の毎週の手紙を書いていた。その夜、ヒバードは、Sunday eveningとして、段落を改めて直後の感想を書いている。それによると、友人が真珠湾のニュースを伝えに来てくれ、彼らの家に連れて行って夕食を食べさせてくれ、慰めてくれたこと。しかし、彼らと一緒にいるのは辛かったので、一人で聖公会の教会の夕拝に行ったこと。そこでは、礼拝の最初にアメリカ国家が歌われ、今後この問題からどこに行っても逃れられないと思ったことが述べられている。更に、ハワイにいるフランシス・クラップとアリス・ケリーの安否を心配し、またフィリピンで従軍している友人のこととアメリカにいる日系人のことを心配した。(ヒバード、1941年12月7日付けの手紙より)。
- 9 アメリカの大学から招聘をうけたという話は、ヒバードが日本に戻るときに、*The Capital Times* の “To Back Cause of Democracy at Nip School” という記事に載っており、以下のように書かれている。“Because of the opportunity it offers to further the cause of democracy to the new Japan, Esther Lowell Hibbard, Madison is turning her back on offers of six or seven times more salary at American colleges to accept a \$800-a-year professorship at Doshisha university, Kyoto.” (新しい日本の民主主義の推進のために、マディソンのエスター・ヒバードは、アメリカの大学の6倍から7倍の高額の給料を断って、同志社大学の年間800ドルの教授職を受けようとしている)。この新聞記事は、ウィスコンシン大学アーカイブスのYMCA Materials 中のヒバード書簡に保存されている切り抜きで、発行日時は1946年9月3日である。
- 10 クリスティーナ・ロセッティ (Christina Rossetti) (1830-1894) : イギリス、ヴィクトリア朝女流詩人。ロンドン生まれ。社交を好まず、隠者のような生活を送つ

た。日本では、「誰が風を見たのでしょうか」の歌の詩人として知られている。“In the Bleak Midwinter”は、有名なクリスマスの讃美歌となり、クリスマスになるといつも歌われる。日本語の讃美歌にも取り入れられており、日本基督教団讃美歌委員会（1954年版）の『讃美歌』468番がそれである。

- 11 ヒバードが1929年にアメリカン・ボードに送った宣教師申込書は、1929年1月15日に書かれ、1月24日に受領されている。ホートン・ライブラリーの宣教師文書（ABC 6: Candidate Department 1821-1939, v. 121 H 1926-1930）の中に含まれている。
- 12 ヒバードは、ロセッティの“In the Bleak Midwinter”を非常に大切にしていた。それは、彼女が再来日した年のクリスマス・シーズンの最後に、1946年12月16日（月）に開催された同志社神学部主催によるクリスマス・コンサートで英語と日本語の両方でこの詩を朗読し（ヒバード、1946、12、22、#21）、また退職を前にして、日本での最後のクリスマスの説教で引用したことからも分かる。

引用文献

- American Board of Commissioners for Foreign Missions. American Board of Commissioners for Foreign Missions archives, 1810-1961, Houghton Library, Harvard College Library, Harvard University.
- Edasawa, Yasuyo. (2013) “Miss Hibbard’s First Year in Japan: The Start of a Remarkable Missionary Career” 同志社女子大学英語英文学会誌『アスフォデル』48号、2013、pp.96-124.
- 枝澤康代 (2015) 「終身宣教師への道—Esther L. Hibbard の場合—」同志社女子大学英語英文学会誌『アスフォデル』50号、pp.68-96.
- 同志社女子大学・同志社同窓会 (1999) 『エスタ・L・ヒバド自伝—ある宣教師っ子の思い出』（『ある宣教師っ子の思い出』増補改訂版）、同志社同窓会出版
- Hibbard, Carlisle V. (1954). “Carlisle V. Hibbard Papers, 1811-1954”. The Archives of the Wisconsin Historical Society, (Call number: Wis Mss QN; PH 1556).
- The Capital Times* (September 3, 1946) in Carlisle V. Hibbard’s Correspondence, Series 51/2, YMCA Materials, (1954), University of Wisconsin-Madison Archives.